

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」ともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。
読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。
第1問の正答率はおおむね高かったが、問2のように、複数の人物が登場する文において、誰が誰に対して何をしたか、という関係性の理解が不十分であったり、問3のように、否定文や現在完了形を含んだ文を聞き取りの場合に、時系列を捉え、全体として何が起こったのかを把握しきれなかったための不正解が目立った。このことから、受験者は個別の単語は聞き取れているものの、単語の間のつながりを解釈し、発話全体の意味を正確に理解するための実践的な文法力において弱い傾向が見てとれた。
- ・第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを

参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

本テストにおいては、得点率が高かった大問である。文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることがその主な理由であると考えられる。しかしながら、問8では、物の位置関係を把握する問題、また、問11では否定を含む表現がある問題であったため、正答率が他の問題と比較して低かった。

- ・第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能(例:依頼, 誘い, 感謝等)を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問14と問16をイギリス英語による発音とした。また、この大問から音声は1度しか流れない。

第3問全体の得点率は試験全体の平均得点率に近かったが、小問によって正答率が高いものと低いものが混在していた。例えば、問17では、一方の話し手が、他方の話し手が行ったコンサートについて、そのコンサートの内容が支払ったチケット代に見合ったものであったかを問う比較的抽象度の高い設問であったため、他の小問に比べて正答率が低かった。

- ・第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通して、話し手の意図を把握する力を問う。最初の問題については、昨年度はグラフを完成させる問題であったが、本年度は、クリスマスの夜にあった出来事の話の聞き、話の順序に図を並べ替える設問であった。また2問目は、昨年度と同様に表を完成させる問題であったが、その内容は、衣類などの分類についての指示を聞き、それぞれの衣類などをどの箱に入れるのかであった。

グラフの設問は正答率が高く、第1問の文(2回読み)・第2問の対話(2回読み)・第3問の対話(1回読み)から、長めのモノローグに移行する設問としてのつなぎの役割を果たせたとみなせる。図の並べ替え設問も、表を完成させる設問も正答率は高かったが、問22はカテゴリーと対象となるものが結び付きにくかったためか、第4問Aでは正答率が低かった。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を1つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは、4人の友人が薦める本の説明を聞き、読書会で取り上げる本を決める。4人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本人英語の発音とした。

- ・第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点をとらえる力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは、ギグワークについての講義を聞く。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、更に講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

相対的な難易度がやや高い大問であることから、全体的な得点率はやや低めであったが、より総合点が高い受験者による正答率が高く、より総合点が低い受験者による正答率が低い結果であったことから、能力の識別力が高かったと判断される。

- ・第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、料理のレシピについて意見交換をする二人の会話を聞いて、会話の趣旨を判断する。

第6問Aの2問については、それぞれの平均点は、全体の平均点に近い得点であり、その得点分布から、問34は平均点付近の受験者とそれ以下を、問35は平均点周辺の受験者とそれ以上をよく弁別している。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、サンゴ礁を例にエコ・ツーリズムについて議論する4人の意見交換の様子を聞き、話者の立場を判断する。

第6問Bでは、4人の話者が登場するが、男女の声に加え、アメリカ英語・イギリス英語・日本人英語の発音による区別と、会話の中でお互いの名前を呼び合うといった工夫がされた。ある特定の話者の意見を支持する情報を選ぶ問36の正答率が、全体の平均得点率に近いことから、話者の区別は比較的良好にできていたと思われる。問37はやや正答率が低かったが、これは話者の区別ができなかったためではなく、Brianが話題として触れていることと主張の根拠として話していることの区別が十分にできていないためだと考えられる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは、昨年度の課題を改善しつつ、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という共通テストの問題作成方針が色濃く反映されたものであり、「出題教科・科目において問いたい思考力、判断力、表現力等を明確にした上で問題を作成する」という方向性が明らかであるという意見が示された。そしてこういった傾向は望ましく、教育現場での授業改善にも確実につながっていくものである点が評価された。

また、高等学校教科担当教員からは、出題内容・範囲、問題の分量・程度、及び表現・形式についておおむね適切であったとの総評と併せて、本テストの特徴として、読まれた内容を構成するパーツとしての単語や表現をよりどころとして正解を選ぶタイプの出題ではなく、与えられた状況や場面において発せられた内容全体から話者の意図や要点を見極めて情報を整理し正解を選ぶ、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多いことが挙げられた。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下に主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・第1問については、短い発話であるため、やや唐突に始まる印象があるとの指摘を受けた。これについては本テストを通じて、なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしているが、今後なるべく場面や状況を把握しやすい設定の内容から初め、徐々に英語に耳を慣らしていける流れを作る方針を継続したい。
- ・第2問については、イラストやピクトグラムを分かりやすいものとするよう、引き続き配慮して欲しいとの意見があり、この点については今後も慎重に取り組みたい。
- ・第3問については、初回であった昨年度は、アメリカ英語でのやり取りが続いている中で、唐突にイギリス英語の会話が始まることに対して受験者に戸惑いが生じる可能性があることが指摘されたが、本年度を含め受験者がこの形式に慣れてきたという指摘もあり、イギリス英語の出題であることを無理に日本語で設定するよりも、受験者が取り組みやすいより自然な状況設定に注力することとしたい。
- ・第4問～第6問については、聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短いとの指摘を受けた。この点については、30分という限られた試験時間内に、いかに多くの設問を含めて信頼性を上げつつ、問題の状況設定や解答に求められている情報を明確に示すか、バランスを意識して問題作成を続けたい。

第5問では受験者の背景知識の有無により理解内容に差が出ないように、との指摘を受けた。

関連して、馴染みがそれほどない話題である場合には、より具体的な例を導入段階で示し、全体の理解を促進する、との提案を受けた。いかなるテーマを選択しても、必ず背景知識の量には個人差があるが、背景知識があってもきちんと聞かないと解けない問題と、背景知識がなくてもそれを補う工夫をした問題の作成を今後も目指すこととする。

この他、読み上げ回数については、日常的な会話については2回読まれているものを1回にし、講義などの長いものを聞き、複数の情報を統合する形式の問題では、1回読まれているものを2回とする提案があった一方で、試験前半における2回読みについては、受験者の負担を考慮するとなされるべき配慮と捉えることもできる、との意見もあった。また、英語変種の導入に関しては、国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映しており、大変良い傾向であると評価された。

4 ま と め

本テストの平均点は59.45点であり、前年度と比べて若干高くなった。昨年度の共通テストにおいて、センター試験と比較して、共通テストでは問題の種類と数が増え、難易度も上がったことが共通認識となり、受験者が4技能の学習を強化した結果、リスニング力が全体的に向上した可能性が示唆される。

本テストは、センター試験に比べ、より4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に集約する措置をとった。また、モノログ、対話、講義、4人の討論といった様々な場面や状況を設定し、学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度実現化できたと考える。こうした方向性については、今後も継続していきたい。

共通テストが高等学校の授業改善へ及ぼす影響については、高等学校教科担当教員からも示された。英語をコミュニケーションのツールとして使う場合を想定し、生徒自らがそれを体験するような授業設計や指導の在り方を追求すべきであるとの見解は、まさに問題作成部会の意図したことと一致する。

また、教育研究団体からの指摘のとおり、思考力・判断力・表現力等を問うことが目的でありながら、情報処理能力や、それを速く行うことだけを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきであるが、一方で実際のコミュニケーションの場で求められる即時的な対応力は、聴解における基礎力として位置付けるべきであると考え。受験者に過度の負担を与えることは避けつつ、聞き取ったことを瞬時に「理解・解釈」できるリスニングの流暢性を高める学習にも是非力を入れてほしい。共通テストが今後も、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるよう心したい。